

### 3) 傷コアユの出現状況および冷水病菌の保菌状況調査

里井晋一・二宮浩司

【背景・ねらい】近年、湖中アユの躯幹や尾柄部に潰瘍症状を示すもの（いわゆる傷コアユ）が見られることがあるため、その出現状況を調査するとともに、原因を明らかにする一環として細菌検査を行った。

#### 【成果の内容・特徴】

##### （1）傷コアユの出現状況

4～7月にかけてエリ、ヤナ、沖スクイ網、水産試験場（以下、水試と略す。）水路等で採捕された1671尾について傷の有無を調査した。（表1、2）平均出現率は8.8%。高率で出現した水試水路分（38.8%）を除くと4.6%であった。水温の上昇とともに増加し、7月に頭打ちになる傾向であった。漁法別では、エリに比べてヤナの方が多かった。沖すくい網が多いのは、採捕の時期が6～7月であることが原因と思われた。

##### （2）細菌検査

傷コアユの症状が冷水病の症状と似ていることから、細菌検査を実施した。

40尾調査したところ、11尾から冷水病菌が分離された。（検出率27.5%）6月下旬以降の検査では冷水病菌は分離されなくなった。6月下旬（6/24）までの検出率は61.1%と比較的高率であり、冷水病の関与が示唆された。（表3）

##### （3）冷水病保菌状況調査

###### ①平成5年12月～平成6年7月（東大農学部との共同調査）

検査した880尾中、保菌魚は確認されなかったが、現行法では判定しにくい例が多く（判定不能101例）、現在改良法を検討中である。

※東大独自の調査では、わずかながら保菌が確認されている。

###### ②平成6年11月～平成7年3月

###### A. 従来法（腎臓から改変CY培地に分離し、生えてきた菌を抗血清で確認）

検査した350尾中、1検体から冷水病菌が検出された。

###### B. ホジナイズ法（複数のアユを丸ごと一緒にすりつぶし、改変CY培地に塗抹、低温（5℃）で長期間（約1カ月）培養）

615尾検査したところ、いくつかの検体で冷水病菌が確認された。

#### 【成果の活用面・留意点】

引き続き、本調査を実施し、出現状況を把握するとともに、その原因を明らかにするため、細菌検査等を実施し、冷水病との関連について調査研究を行う。

表1 琵琶湖の傷コアユ出現状況調査  
(平成6年4月～7月)

(エリ)	検体数	出現数	出現率(%)
4月	200	0	0
5月	200	2	1
6月	310	3	1
7月	234	22	9.4
計	944	27	2.9
(ヤナ)			
4月	50	1	2
5月	150	2	1.3
6月	44	12	27.3
計	244	15	6.1
(沖スクイ網)			
6月	100	14	14
7月	200	12	6
計	300	26	8.7
(水試水路)			
5月	54	11	20.4
6月	40	21	52.5
7月	89	39	43.8
計	183	71	38.8
合計	1671	139	8.3

表2 琵琶湖の傷コアユ月別出現状況

	検体数	出現数	出現率(%)
4月	250	1	0.4
5月	404	15	3.7
6月	494	50	10.1
7月	523	73	14
合計	1671	139	8.3

(水試水路を除いた場合)

	検体数	出現数	出現率(%)
4月	250	1	0.4
5月	350	4	1.1
6月	454	29	6.4
7月	434	34	7.8
合計	1488	68	4.6

表3 傷コアユからの冷水病菌の分離結果

採集地点	検体の状況	採集月日	検体数	菌確認数
ヤナ	生	94.4.21	1	0
水試水路	生	94.5.16	11	6
水試港	生	94.6.17	1	1
犬上川河口	生、死	94.6.24	5	4
犬上川河口	生、死	94.6.27	3	0
ヤナ	生	94.6.29	5	0
沖スクイ網	生	94.7.6	3	0
水試水路	生	94.7.7	5	0
沖スクイ網	生	94.7.8	2	0
エリ	生	94.7.18	4	0
合計			40	11

6/24まで11/18=61.1%

平均27.5%